

社会規範としての性役割 — Part 2 —

——青年期における性役割の認知——

柏 木 恵 子

I 問 題

生来的に決定されている生物学的特性によって、人は男性か女性いずれかに明白に分類されている。さらに人は、単に生理的・身体的特徴においてだけ性別があるのではない。行動の仕方——話し方、考え方、感じ方などいろいろな面で——、興味、性格など心理的諸側面においても男女の性による相異や対照をみせている。これらは、さきの生物学的性差に対して心理学的性差と呼ばれている。

生物学的な性別は生来的に、——多分受精の時点で規定され、その後変化することなく定められた性が生涯つづく。これに対して、後者の心理学的性差は、生来的に存在するものではない。また、生来的に規定されている生物学的性差から必然的に運命的に生じてくるものでもない。さらに、一旦定まったのちは不変だというものでもない。心理学的性差は生物学的性別と深いかわりをもちながらも、それだけに絶対的に規定されることなく、むしろ生後の経験により、また環境からの影響の中で形成されてゆく。つまり心理学的性差は生来的、前決定的なものではなく、学習されるもの、後天的なものである。

この証左はいくつもある。たとえば、半陽性で生れ、本来の生物学的性別とは逆な性に認知されたケースでは、その性格や行動、興味などは、本来の性ではなく、誤って認知されてしまった性の特徴を帯びてゆく。そして後年、本来の性（染色体テストによって判明する生物学的な性）に転換（修正）しても、それまで身につけてきた心理学的な特性から脱することは難しく、新たな正しい性別に応じた特徴をもつことは非常に困難であるという（Money et al. 1957）。また、生物学的な性と心理学的性差とは、必然的・固定的な関連をもつものではなく、その人のおかれた環境によって規定されることは、ニューギニアの諸部族についての有名な Mead (1935) の報告がよく示している。

すなわち、ある部族では、われわれの社会にみられるような男女の性格差異は全くみられず、むしろ男性の方が柔和、温好で、女性の方が活動的・攻撃的だという。そして、その社会にみられるこうした心理学的な性差に丁度対応するような、子どもの性別に応じて親が行なう差別的しつけがあることも見出されている（Barry et al. 1957）。

このように、子どもの心理学的性差は生後の環境の中で親のしつけをはじめとする社会からの働きかけによって形成されてゆく。換言すれば生をうけた社会ごとに男女の性に対して、それぞれ特定の行動や性格上の特徴が期待されており、子どもはこれを何らかの仕方で獲得してゆく結果、社会ごとにある心理学的性差が生じ、存在しているといえよう。

このような意味で、心理学的性差は社会的な性役割の獲得ということができよう。

さて、このような性役割の獲得ないし発達、どのようなプロセスを辿るのだろうか。それは生後直ちに性別が認知され、それに応じてピンクか、ブルーの服や毛布が与えられることに始まり、その後、男児か女児かによって親は微妙にしかし明白にちがった仕方で扱ってゆく。乳児が泣くことに対しても、女の子である方が親は余計反応し、かまってやるという風に、ごく初期の乳児への養護の仕方にも既に性別による差がつけられているという最近のデータもある。さらに、幼児、児童期を通じて子どもの勉強、遊び、ことば使い、服装、進路などさまざまな面で親は子どもの性別に応じて異なったしつけをしてゆくのが普通である。この性別しつけは、日本では男児に対しては学業成績を促進し、活発さ、積極性を助長するようなもの、女児に対しては身なり、作法などの美しさや従順さを奨励するといった方向のものである。（柏木ほか1973）

この性別しつけが子どもの性役割学習を推進していることは疑いない。大まかにみても、ある社会での心理学的性差の内容と方向は、性別しつけの内容、方向とほぼ対応していることがその何よりの証拠である。とくに外からの強化が圧倒的な規定力をもつ子どもの幼少の時期は、親の性別しつけの効果は大きく、親がどのような形で、またどの位適確に性別しつけをしているかによって子どもの性役割行動は規定される。

ところで、性役割の学習、発達は、このような外的強化だけによってではない。一般に子どもは年長になるに従って、外から与えられる強化の規定性は相対的に小さくなり、その効力は後退してゆく。そしてそれに代って、別な仕方での学習がクローズアップしてくる。これを性役割の発達についていえば、親のしつけという強化の規定は減退してゆく。柏木らのデータによると、小学校の高学年から中学生頃になると、親のしつけと子どもの性役割発達との（+）の相関はなくなってゆく。そして中学生、とくに女子ではむしろ親のしつけとは逆相関をもった性役割発達が子どもにみられさえする。このような事実は、児童後期以降の青年期において、性役割の発達がそれ以前の幼児期とはちがった形で、別な学習法でなされることを示唆している。すなわち、青年は親の性別しつけの背景にある親および社会の性役割期待（社会規範としての性役割）とは別個に、自分自身の性役割観をもつようになる。これは青年期に形成される自己概念の一環として、性役割についても、あるべき姿、自分が理想とする性役割概念を作り上げてゆく。そして現実の自己を、この理想的自己、自己の理想とする性役割に近づけようとする。Kohlberg (1966) のいう性役割の認知学習は、まさにこ

うした青年の特徴を指摘したものである。このような青年の自己形成過程では、外的に与えられる性別しつけよりも、青年自身が性役割をどのようなものとして認知し、概念化しているか、つまり青年の性役割観が大きな比重を占めることになる。青年の性役割観は、幼少時の親のしつけにとって代る青年期の性役割発達の key ということができよう。

以上のような観点から、われわれは青年期の性役割発達を、その認知的側面から捉える試みをしてきた（柏木 1967, 1972）。そこで明らかにされたことは、中学生から大学生にわたる青年期に、性役割の認知パターンには発達的な変動があること、すなわち、社会で一般に認められている男女の性役割の分化（差異）を素直に受容し肯定することから、それを拒否し反発し、社会のそれとはかなりちがった性役割観をもつ時期を経て、やがて再受容の方向をとる、といった変化の過程である。さらに、このような発達的变化には性差が著しく、青年後期の性役割への反発、拒否や葛藤は、女子において著しいことが見出されている。

以上のような結果から、青年自身が理想とする性役割つまり青年の性役割観と、社会一般の性役割期待（社会規範となっている性役割期待）とが、青年においてどのような関係をもって存在しているのかを、より直截に捉える必要性がクローズアップしてくる。とくに前述のようにより多くの葛藤やズレがある女子青年について、これを明らかにすることが必要であろう。以下の報告は、この点を扱った研究の一部で、さらに広範な年齢層についてのデータ、及び男子のデータとの比較によって検討しつつあるものの最初の部分にあたるものである。（柏木 1974）

II 研究目的

青年期の性役割発達を認知的側面から検討する試みの一つとして、女子の大学生を対象に次の諸点を検討する。

- (1) 青年自身の性役割期待（青年の理想とする性役割はどのようなものか）
- (2) 青年が認知する社会一般での性役割期待（青年は社会一般の性役割期待をどのようなものとみているか）

青年が性役割に関する自分の認知を形成してゆく場合、自分の属している社会での性役割がどのようなものとして概念化され期待されているかが背景となっている。とくに、それを青年自身がどう捉えているかが重要である。このような観点から社会規範としての性役割期待を捉えるにあたって、あくまで青年の認知を通して、青年の認知において捉えようとしたのが(2)である。

III 方 法

質問紙法による。これまでの柏木の研究で開発し使用してきた質問紙を用いる。それは青

年の性役割の認知次元として、因子分析の手法で抽出された3次元——男性役割に関する2因子、女性役割に関する1因子に該当する項目21項目から成るものである。この3因子およびそれに該当する項目は次のようである。

★男性役割に関する因子（次元）

第1因子——知性——

頭がよい、学歴がある、理論的、政治的関心、線の太い、かわいい(－) 指導力、気持のこまやかさ(－) 背が高い、謙遜(－) 仕事に専心的

2. 第2因子——活動性——

経済力のある、意志強固、活発な、積極的、仕事専心、広い視野、忍耐強い、自信、

★女性役割に関する因子（次元）——美・従順——

従順な、謙遜、男性に依存的、容貌美しい、かわいい、気持こまやか、仕事に専心的(－)

以上に含まれている21項目についてそれら特性の「望ましさ」を評定するための7段階スケールを設定し、次の4種の教示に従って全21項目につき4評定を求める。

1. 自分自身（青年自身）が男性に対して、その特性をどの程度望ましいと考えているか、
2. 自分自身が女性に対してその特性をどの程度望ましいと考えているか。
3. 社会一般（世間）では、その特性は男性にどの程度望ましいとされている（と思う）か。
4. 社会一般（世間）では、その特性は女性にどの程度望ましいとされている（と思う）か。

1と2によって、青年自身の性役割期待の評定が、3と4により青年の認知する社会一般での性役割認知の評定が、それぞれ行われることになる。また、1と2の差、3と4との差から、それぞれ青年自身および（青年のみ）社会一般が男女の性役割をどのように識別し、どのような役割差異を与えているかをみることができる。

調査対象は東京都内の2私立女子大学生2、3年次100名。

これは前回までの調査で、女子大学生の段階は、性役割の認知の仕方がそれ以前の段階や男子に比べて、顕著な差があり、性役割受容にある葛藤があることが示唆されたことから、今回、その段階に焦点を限って検討することにしたものである。

IV 結果および考察

以上の手続きで得られたデータは、次のように処理分析された。すなわち、同一項目についての男性評定値と女性評定値の差すなわち1と2、3と4との差をそれぞれ求め、全被験者の平均差異得点を項目ごとに算出する。

この差異得点は、それぞれの項目の示す特性についての期待が、男性に対する場合と、女

性に対する場合とどのような差異——男性あるいは女性いずれに高く期待しているか、その差はどのくらいか——があるかを示す。従って、この得点が大であるほど男女をその特性について大きく識別していることを意味する。

以上の測度によって次の3側面にわけて結果をみてゆく。

- (1) 青年自身の性役割認知——1, 2のデータから。これは柏木が既に行なった調査と同じであるが、5年の年月のへだたりによって変化しているかどうかともみることになる。
- (2) 青年の認知による社会一般の性役割——3, 4のデータから。
- (3) (1)と(2)の関係、つまり青年における自身の性役割観と、社会一般での性役割期待との認知上の一致ないしズレ。

(1) 青年自身の性役割認知

21項目の1, 2の差異得点を検討した結果、全項目に有意差が認められ、これらの項目特性全てで青年が男女の性役割として差異を認知していることを示している。この結果をさきの柏木の調査での大学生女子群の結果と対比してみると、そこでも同様に全項目に有意差があったこと、その数値はほぼ等しく、得点差は±4以内にとどまること、などが明らかである。このことは、この5年間に性役割と関連した社会情勢や価値観などにいくつかの変動——たとえばウーマン・リヴ、青年文化におけるユニ・セックス現象など——があったにもかかわらず、青年自身の性役割観そのものには全体としてはそれほど大きな変化はないことを示している。しかし、少しこまかにみると、ある変化が起りつつあることが示唆される。21項目をさきにのべた性役割の3次元——男性役割次元である、1. 知性次元, 2. 活動性次元, 女性役割次元である美・従順次元にそれぞれ該当する項目をまとめ、3次元ごとの平均得点を算出し比較してみると次表のとおりである。

表1

		前回の結果	今回の結果
男性役割次元	1 知 性	4.30	3.51
	2 活 動 性	6.42	5.03
女性役割次元	1 美・従順	2.36	2.47

これによると、男性次元では2次元ともに前回の方が得点が高く、女性次元では今回の方が高くなっている。この差はとくに男性次元で著しく、男性の役割とされている特性について男性と女性への役割期待は前回より差が小さくなってきており、これらの次元によって男女の性役割を識別することは次第に後退し減じてきていることになる。この変化は、今のところ有意ではないが、今後さらにのちには、この次元の性役割識別次元としての意味が減少

してゆく方向を示唆しているのかもしれない。この点については、いずれ何年か後に同様の調査を行なうことによって確かめるべきであろう。

(2) 青年の認知による社会一般の性役割

被験者が社会一般の性役割として21項目について行なった評定——男性評定値3と女性評定値4について(1)と同様の処理分析を行なった。これは、ここで用いた質問紙の21項目が、さきの研究で青年自身の性役割識別に有効であると認められた項目を用いていることから、社会一般の性役割期待を問題にするにあたっても有効かどうかを吟味することにもなる。差の検定を行なった結果、「忍耐強さ」で差が認められなかったほかは、「経済力」が5%レベル、その他の項目は全て1%レベルで有意差が認められた。これは1項目を除く項目の示す特性が、青年の認知する限りでの社会一般の性役割期待でも男女の識別的な特性とされていることを示している。ここで差のなかった「忍耐強さ」がさきの青年自身の性役割観においても比較的差の小さい項目であったことを考えあわせると、一層である。

(3) 青年の性役割観と社会一般の性役割期待との関係

これまで青年の性役割観と青年のみる社会一般での性役割期待とを別個にみてきたが、ここでは両者の関係を検討してみる。そのために既に抽出されている3次元ごとの因子得点(各因子に該当する項目の男性・女性評定値の差異得点合計)を求めて比較を行なった。(表2)

表2

			(1)青年自身	(2)社会一般
男性役割次元	1 知 性		3.51	11.29
	2 活 動 性		5.03	14.52
女性役割次元	1 美・従順		2.47	7.37

これをみると、「社会一般」は「青年」に比べて、いずれの次元でも因子得点が著しく高いことが注目される。このことは、さきに行なった男性・女性評定値の絶対値においても、また差のt値においても、1項目を除きいずれも「社会一般」の方がはるかに大きい値であった事実を考えあわせると、どの次元も社会一般の方が性役割の識別度が大きいことを示している。つまり社会一般の方が青年自身よりも男女の性役割により大きい差異を考え、男女にそれぞれちがった特性を期待しているといえよう。勿論ここでいう「社会一般」は、実際に社会一般がそうである現実の姿ではなく、あくまでも当の青年が認知している限りの社会一般である。実際には青年が認知しているほど、社会一般は性差を識別してはいないのかもしれない。しかし、青年自身の性役割観の形成にとっては、社会一般が実際にはどうであるかよりも、青年がそれをどうみているか、青年の眼に社会一般がどう映じているかの方がより

大きな意味をもつであろう。

次に青年の性役割認知と社会一般の性役割期待との関係を、同一被験者における男性および女性についての2つの評定値を比較することによって検討してみよう。21項目各々について青年の男性評定値(1)と社会一般の男性評定値(3)（女性評定については(2)と(4)）との間の差を算出し比較を行なった。そして3つの次元ごとにその次元に含まれる項目のうちと、(1)と(3)、(2)と(4)間にそれぞれ有意差の認められた項目数をくらべてみると、表3のとおりである。

表 3

次元（項目数）	男 性 役 割 次 元		女 性 役 割 次 元
	1 知 性(11)	2 活 動 性(7)	1 美・従順(8)
男性についての評定の場合 (1)と(3)の比較)	8	4	6
女性についての評定の場合 (2)と(4)の比較)	11	7	7

ここで差の認められた項目が多いことは、それだけ青年自身と社会一般との間で性役割認知の仕方が異なり、性役割期待の高さに差があることを意味する。従って、この結果は、性役割の認知の仕方一般についても、またとくに女性への役割期待に関して、青年自身と社会一般とはより大きな差異があること、しかも単に識別度についてだけでなく、その特性をどのくらい期待するかという期待の高さそのものに、両者の間には大きな差異があることを明らかにしている。

次にこの青年と社会一般との間に見出された差異が内容的にどのようなものを吟味してみよう。各次元ごとに、その次元の意味する方向が、青年、社会一般いずれの方で高いかを項目ごとにしらべてみる。その結果、男性についての評定、女性についての評定の場合、それぞれで青年の方が社会一般より評定が高いもの、つまりその特性の期待が青年でより大きい項目は次のとおりである。

男性についての評定の場合：

政治的関心の高さ、頭のよさ、視野の広さ、自信がある、などの男性役割次元に属する項目、および、気持のこまやかさ、かわいらしさ、など女性役割次元に属する特性

女性についての評定の場合：

指導力、政治的関心、線の太さ等々、男性役割次元に属する特性のほとんど全項目（逆にいえば女性役割次元の項目では、例外なく社会一般の方が評定が高い）

このような青年と社会一般との評定にみられる内容的な相違は、次のようなことを物語っている。すなわち男性への役割期待に関しては、青年と社会一般との差異は単純に一方が高く他方が低いというものではない。青年が高く期待する面と、社会の方が高い期待をもつ面

とが、それぞれ質的にちがったものである。とくに青年自身は、通常は女性の役割特性とされている特性を男性に対しても強く期待しているところに社会一般の男性役割期待とは著しくちがった特色がある。また女性役割に関しても、男性の役割特性と通常はされている特性をより高く女性に期待していることも顕著な特徴である。

つまり、社会一般での性役割期待は、男性と女性にそれぞれ対照的な特性を期待している。これは丁度、男性役割次元、女性役割次元と分れたのに対応する対照的な特性である。こうした社会一般の男女性役割の分化に対して、好青年自身の抱いている性役割観は、男性と女性の役割特性として相互に内容的に重複しあったものである。男性に対してもある女性役割次元の特性をもつべきだとし、また女性に対しても、通常、男性の役割次元に属する特性を高く期待している。従って、ここでは男性の性役割は相互に接近し会い重複しあったものとなっている。これは最近の青年文化とくに服装、風俗などにみられるユニ・セックスの現象とある点で対応するものとみることができよう。

さて以上の結果は、ここでの調査対象である女子青年に限った現象であろうか。これまでの研究経過を考えあわせながら、ここで見出された青年と社会一般との差異は、大学生段階の女子にもっとも顕著であろうことは確かだと思われる。しかし同じ年代に属する男子ではどうか、また発達的にみて青年と社会一般とのズレが女子においてどのような消長をたどるのか、そしてその消長過程の中でこの女子大学生はどのように位置づけられるだろうか。これらの点については、これにひきつづいて行なった調査によって現在検討中である。ただ、同じ年代でも男子ではこの女子ほどの大きなズレはないであろうし、女子も年少レベルではズレが小さく、その後ズレが大きくなり、恐らくこの大学生頃をピークとしてその後再び減少してゆくであろうことが予想される。そのような事情は女子青年には、性役割観形成の上で男子青年にはない困難な問題、葛藤をもつことであり、これをどのように解消してゆくかが女子青年の人格的社会的適応の上での課題だと思われる。

文 献

- Barry, H., Bacon, M.K. & Child, I.L. 1957 A Cross-cultural Survey of Some Sex Differences in Socialization. J. abn. soc. Psychol., 55. 327~332
- Kagan, J. 1964 Acquisition and Significance of Sex Typing and Sex Role Identity. Review of Child Developm. Research. vol.1. 137~167
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割認知 教心研, 15, 193~202
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割認知Ⅱ 教心研20. 48~58
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割認知Ⅳ 教心研22 205~215
- 柏木恵子ほか 1973 子どもの性役割学習過程 ——母親の要因との関連で—— 東京女子大学学会論集23. 73~98
- Kohlberg, L. 1966. A Cognitive-Developmental Analysis of Children's Sex-Role Concepts

- and Attitudes. In Maccoby, E.E. (ed.). The Development of Sex Differences, Stanford Univ. Press. 82~173.
- Mead. M. 1935. Sex and Temperament in Three Primitive Societies. Morrow.
- Minuchin, P.1965. Sex-Role Concepts and Sex typing in Childhood as a Function of School and Home Environment. Child Developm., 36, 1033~1048.
- Money, J., Hampson, J. G. & Hampson, J.L. 1957. Imprinting and the Establishment of Gender Role. Arch Neurol. Psychiat., 77, 333~336.

〔本学文理学部教授（心理学）1972, 73年度 個人研究員〕